



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会 TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

渡邊 亶

わたなべまこと

日本バプテスト連盟
理事長

「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネによる福音書 16:33)



わたしは、佐々木和之さんという方がおられなかったら、ルワンダについては、十数年前に新聞で読んだ同国内におけるツチ族、フツ族間の悲惨な戦いのあったところという程度の認識しか持ちつづけていなかったと思う。

「世界の片隅で無抵抗の人が無残に殺されていようと、それが他人であれば黙認するという無関心、そこに私たち人間の罪が現れているのではないでしょうか」という佐々木さんの言葉に射貫かれて、まことにささやかながら、

ルワンダにおけるジェノサイドや内戦によって傷ついた人々の癒しと、和解の働きを支援する輪に加えさせていただいた。

しかし、そこでは「支援する」ということとは全く逆で、ルワンダの平和と和解のために活動する REACH の活動に連なる人々の発信される言葉、そこで起こされる神様の出来事に、励まされ、また悔い改めを迫られている。平和と和解の生き方を示されたイエス様の福音を地で行く活動の道のりは長く、困難と痛みを伴うだろうが、人間の罪に勝利したイエス様の復活の力に与って、連帯して歩む群れのひとりであり続けたい。

佐々木和之

ささきかずゆき

ジェノサイドは「過去」ではない

ルワンダの人々が負っている「過去」が、私達の想像を遙かに超えて重いものであることを改めて感じながら、この時を過ごしています。



ジェノサイド犠牲者の埋葬式

■悲しみのうちに迎えるイースター

明日、ルワンダで二回目のイースター（キリストの復活祭）を迎えようとしています。国民の約90%がクリスチャンと言われるルワンダですから、イースターはクリスマスと並んで最も重要な祝日です。本来ですと、明日はルワンダ中の教会が人々で溢れかえり、太鼓やキーボードなどの楽器を使っての賛美が響き渡る日になるはずですが、今年、イースター礼拝は、賛美のための楽器演奏は無く、喜びの表現も控えめなものになりそうです。それは、今年、イースターが、ジェノサイドで犠牲になった人々の追悼週の始まりとびたりと重なったからなのです。

ジェノサイドは、13年前の今日、4月7日に始まりました。今日から13日までの一週間は、13年前に起きたことをしっかりと記憶し、犠牲者を追悼するための特別な週として定められ、公的なもの私的なものを問わず、お祝いごとを控えることになっているのです。これから一週間、

全国各地で追悼式典が催される予定ですが、その多くで犠牲者の亡骸の埋葬式が行われます。これらの亡骸は、現在全国各地で審理が進められているガチャチャ民衆法廷でなされた加害者の証言に基づき、新たに掘り起こされたものです。

一昨日、ユディトさんという女性の強い要望に応え、REACHの同僚達と一緒に、一時的に多くの亡骸が保管されている場所を訪ねました。ユディトさんは、ジェノサイドで夫、子ども、母親、兄弟など11人の近親者を失いましたが、そのうち数名の亡骸がそこに保管されているとのことでした。

私達が訪ねたのは、郡政府の敷地内にある小さなホールでした。ホールに入る前に、社会福祉担当の政府職員が、出先からオートバイに乗って帰ってきました。荷台には、穀物等を詰めるのに使われる、白いナイロン製の袋が積まれていました。彼は、掘り起こされた亡骸を袋詰めにして保管場所まで運んでくる作業を、ここ数日ずっと続けているとのことでした。今年郡内で掘り起こされた亡骸は250体以上ということでした。

強烈な異臭が立ちこめるホールに入ると、所々に穀物袋が置かれていました。その一つひとつに白骨化した亡骸が数体ずつ収められているのでした。担当者は、それから私達をホールの前方に連れて行き、掘り起こされた覆いを取り払いました。すると、そこには、頭髪や皮膚がまだ残っている亡骸が、数体折り重なるように置かれていました。低温の地中深くに埋められていた亡骸だということでした。

殺害から13年近く経っても白骨化せず、ほぼ原型を留めている衣服からのぞいている顔、腕、脚には、干からびた皮膚が付着したままになっていました。その一つ、子どもものらしい小さな亡骸は、頭蓋を何かで叩きつけられたのでしょうか、頭髪を残した頭部の一部が陥没していました。その隣には、女性らしき亡骸があり、錆び付いたブレスレットが、手首にはめられたままになっていました。

私はその時、私の右側に立っていたユディトさんの顔、いつもは、きれいな歯を見せながら笑顔で接してくれる彼女の顔が、苦痛に歪んでいるのに気づきました。彼女は、涙が溢れ出てくる自分の目を拭いながら、「そのブレスレットを付けているのは、私の母です」と、ポツリと言いました。他の亡骸も彼女の弟など近親者のものだということでした。

しばらくの間、そこに居た誰一人として口を開く者はありませんでした。目の前の亡骸を前に、ただ立ちすくむしかなかったのです。

追悼週を前に、ユディトさんはこのように語っていました。「これからの時、私達生き残った者達は、家族の亡骸と共に過ごすのです」。多くの「生き残った者達」にとって、ジェノサイドは「過去」ではありません。失われた家族を弔い、その人達の死を悼むプロセスが、12年以上を経た今ようやく始まろうとしているのです。

そしてまた、ルワンダで続いた武力紛争で死んでいった人々は、前政権が犯したジェノサイドの犠牲者だけではありません。ジェノサイドと同一に論じることができないものの、地域によっては内戦中に現政権側の兵士によって家族を殺された人達がいるのです。また、ジェノサイドの後、現政権に支援を受けた武装勢力の攻撃によって、難民として生活していた旧ザイール（現コンゴ民主共和国）で家族を失った人々が多数存在します。これらの人々が、失った家族を公然と追

悼することが許されていないという、国民和解にとっての大きな障害が横たわっているのです。ルワンダの人々が負っている「過去」が、私達の想像を遙かに超えて重いものであることを改めて感じながら、この時を過ごしています。



ユディトさん

■いよいよ始まる「償いのプロジェクト」！

ジェノサイドに関与した罪で有罪とされた受刑者達が、被害者の家屋建造に取り組む「償いのプロジェクト」について、これまで『ウブムエ』でも何度かお伝えしてきました。昨年参加する受刑者達や地元の宗教リーダーを対象にしたセミナー、受益者の選定、実施地域である東部キレヘ郡の政府との意見調整などを続けてきましたが、つい先日郡政府から実施許可が下り、いよいよ5月から郡内の三つの村でプロジェクトがスタートします。

プロジェクトに参加する人々は、ジェノサイドに関与した罪を自ら認めて謝罪し、ガチャチャ民衆法廷から「地域労働奉仕」の刑を宣告された受刑者達です。

地域労働奉仕刑の受刑者数は、ルワンダ全国で既に2万4千528人（2007年3月現在）に上っていますが、実際に何らかの労働奉仕に従事している人々の数は、多

く見積もっても2千700人程度に過ぎません。今後ガチャチャ法廷の審理が進んでいくことにより、その数が大幅に増加することは間違いなく、数ヶ月から数年間に渡って労働奉仕に従事する受刑者達の受け皿を創出していくことが急務なのです。

キレヘ郡では、3月現在204名が地域労働奉仕刑の受刑者として登録されていますが、そのうち数十名が他の郡で実施されている公共土木事業の現場に送り込まれているのみです。ですから、REACHが現地のキリスト教諸教派及びイスラム教のコミュニティーと協力して実施するこの償いのプロジェクトが、郡内で実施される地域労働奉仕の最初のケースになるのです。プロジェクトに参加する受刑者達の数は延べ約90名。参加者達は5月からの約10ヶ月間、自らの出身村で週三日、日干し煉瓦造りの家屋の建造に取り組むこととなります。(受刑者の大多数は男性ですが、女性も数名含まれます。)

受刑者達が建てる家屋の受益者は、REACHの活動を通して生まれた女性協働グループとジェノサイドの生存者が結成している互助組織が協議して選んだ25世帯で、自分の家が無いため知人の家に居候している人々か、掘っ立て小屋同然の家屋に住んでいる人々です(女性が戸主である22世帯と男性が戸主である3世帯)。これらの25世帯のうちの20世帯は、ジェノサイドの生存者の世帯です。最も貧しい人々のための家屋建造は、それ自体大切な取り組みですが、このプロジェクトの目的は、単に家を建てるということではなく、罪を認めた受刑者達が、地域労働奉仕刑を単なる刑罰としてではなく、「償いのプロセス」として理解し、それを成し遂げていくのを支援することにあります。加害者が自らの行為を心から謝罪し、その気持ちを償いの行為として表していくこと。そのことによって、加害者が被害者から赦してもらえ保証はありません。しかし、誠意のこもった償いの行為

が具体的に為されていくとき、それを好意的に受け止める被害者は決して少なくないことでしょう。

これまで私がルワンダで紛争の被害者達と関わる中で学んだ最も重要なことの一つは、その人達が自分達に為された不正義と、それによって負わされた苦しみをきちんと承認して欲しいと願っていることです。心の奥底から発せられるその願いへの応答として、言葉による謝罪と共に、その具現化としての償いの行為が必要なのです。

しかし、受刑者達による地域労働奉仕が、被害者達の多くが求める償いの行為になるという保証はありません。事実、これまで行われてきた地域労働奉仕は、異なる地域から集めてきた受刑者達を、彼・彼女らが危害を加えた被害者とは直接関係の無い公共土木事業に従事させるといったものがほとんどです。そこで私とREACHの同僚達は、受刑者が罪の償いとして被害者の生活再建にとって最も有意義な活動に主体的に関わることを重視するこのプロジェクトが、今後全国各地で展開されていく受刑者による地域労働奉仕の良いモデルになるように、実施過程で得られた経験や教訓を政府や他のNGO等と積極的にシェアしていきたいと思っています。

■セミナーでかいま見た希望

4月3日から5日の三日間、キレヘ郡ニヤカランビにおいて、プロジェクトに参加する予定の地域労働奉仕刑の受刑者64名(男性63名、女性1名)を対象にセミナーを実施しました。また、このプロジェクトの調整役として重要な役目を果たしてくれることになっている、地元のキリスト教諸教派の代表者12名にも参加して頂きました。昨年11月末と今年1月にもジェノサイドの加害者を対象にセミナーを実施しましたが(11月のセミナーについては前号を参照)、過去二回のセミナーに参加した人々のほとん

どが、刑務所内で自白し謝罪したために仮釈放になり、ガチャチャ法廷による判決を待っていた人達でしたが、今回のセミナーの参加者は、過去4ヶ月間に進められた裁判の結果、地域労働奉仕刑の宣告を受けた人々です。

今回のセミナーの目的は、ジェノサイドの加害者である参加者の一人ひとりが、1) 被害者が失ってしまったものの大きさや受けた傷の深さについて理解を深めるのを助ける、2) それらの危害を与えた者の責任として、真実の告白、謝罪、弁償等の行為を通して、出来る限りの償いをしていくのを励ます、3) これから始まる地域労働奉仕刑、特に今回の家屋建造プロジェクトを、被害者の癒しと生活再建に役立つ「償いのプロセス」として理解し、誠意を持って取り組むように動機付けをする、の三つでした。

今回のセミナーについて詳しくご報告する紙面が無くて残念ですが、セミナーで出会ったアナスターゼさんという女性についてお伝えして報告を終えたいと思います。アナスターゼさんは、セミナーに集ってきた受刑者達の中で唯一の女性です。物静かに、しかし、こちらの目をまっすぐに見て話す時の柔和なまなざしが印象的な方でした。

セミナーの中で彼女自身が語ることによると、彼女は、ジェノサイドに関与したと告発されたことにより、昨年釈放さ



アナスターゼさん

れるまでの6年5ヶ月間を刑務所で過ごしました。彼女の夫は、今も刑務所での勾留生活を続けています。

つい最近ガチャチャ法廷で確定した彼女の罪状は、ジェノサイドの「共謀罪」です。「ツチ狩り」が続いていた1994年のある日、彼女の集落にも殺人者達がやってきました。「ゴキブリども（ツチ系住民の蔑称）はどこに隠れている？」と怒鳴りながら自分の家に押しかけてきた彼等に、アナスターゼさんは、彼女の集落にあるどの家がツチの家かを教えました。その結果、多くのツチ系住民が殺されたのでした。

「私は自分の舌で神様に対して、人々に対して、大きな罪を犯しました。今私は、その同じ舌で真実を語り続けることを決心したのです」。このように、セミナーの参加者全員を前にして、彼女は静かに、しかし力強く語りました。彼女が自分の罪をはっきりと認めることができるようになるまでにどれだけの時間が掛かったのか、私は知りません。しかし、それは彼女にとって決して容易なことではなかったでしょう。「ゴキブリどもを一人残らず殺し尽くせ。そうしなければ、こちらがやられるぞ!」という煽動によって多くの一般市民までもが虐殺へと駆り立てられていたあの時、そして、それに従わない者は「裏切り者」として殺戮の対象とされたあの時、そうしなければ自分が殺されていたといくらでも言い訳をすることができるからです。

しかし、彼女はそのような言い訳を全くせず、せめてもの罪の償いとして自分はプロジェクトに参加したいとの決意を述べました。そればかりか、プロジェクトのために個人的に材木を5本提供したいと申し出たのでした。

ルワンダの人々と関わり、話を聴かせてもらう中で、私は、被害者が加害者を赦すことの難しさとともに、加害者が自分の罪と向き合い、その責任を受け入れることの難しさについて考えさせられて

きました。ジェノサイドに荷担した罪を認めて謝罪した加害者達の証言を聴く機会がこれまで度々ありましたが、その人達の多くに、犯された過ちに対する自分の責任を過小評価したり、他者に転嫁する傾向、また、自分の「改心の物語」を美化する傾向を見てきました。そして、それと同じ傾向が私自身の中にもあることを感じずにはおれないのです。アナスターゼさんは、人間にとって最も困難なことの一つである「罪を悔い改める」と

いうことを、神様の恵みによって成し遂げたのだと思うのです。

ルワンダに来てから一年半が過ぎました。皆様からの継続的なご支援をありがとうございます。ゆっくりとした歩みではありますが、これからもあせらずに活動を続けていきます。どうか今後とも私達の働きを覚えてお祈りください。

4月7日記

子ども達の様子

佐々木 恵

ささき めぐみ

ピースインターナショナルスクールの子も達と先生方のためにお祈りください。

■ピースインターナショナルスクール

前号でお伝えしたピースインターナショナルスクールで2週間に一度、土曜の午前9時半から11時半まで、毎回折り紙を1・2種類と、簡単な日本語を教えています。このごろは、わらべ唄遊びや伝承遊びもとりいれて、日本の事を色々な角度から知ってもらおうと試みているところです。簡単な手遊びや歌は、子供達が大好きで、「ぞうさん」・「主はすばらしい」・「げんこつ山の狸さん」などすっかり覚えてしまいました。遊ぶ時の子ども達の嬉しそうな目は、本当にきらきらしていて印象的です。また、ゲストもよくお連れします。子どものお友達だったり、私の友人知人だったり、あるいは日本からのお客様だったりするのですが、学校の子も達は、それをとても喜んでくれます。そんなときは、必ず歓迎のダンスを最後にしてくれるのですが、時々私達もそれに参加させられます。どうもリズムにうまく合わせられず、滑稽なダンスになってしまうのですが……。

ある時は、日本から持ってきた浴衣一式と風呂敷を持って行って、浴衣の試着をしても

らいました。写真は、この学校の卒業生で、今は学校の先生をしていらっしゃるデスタさんです。また、風呂敷では、忍者の覆面をしてあげました。デジカメの前にたくさんやってきて、カメラに写った自分の姿を嬉しそうに確認する子ども達、いつまでもその列がとぎれずに大変でした。



デスタ先生

前回の折り紙教室では、生徒達に自由に絵を描いてもらいました。イギリスの日本語補習校の子ども達とその父母の方々が、バザーの収益金を寄付として送って下さったので、そのお礼の手紙代わりとして、絵を描いてもらったのです。

そのとき印象的だったのが、ほとんどの子どもが、何か、目のような絵を描き始めたことでした。ふと黒板を見ると、チョークで「目の絵」が描かれていました。誰かの描いたその絵を、他の子ども達が真似をしていたのです。見本や黒板に描いてあるものをすぐに真似する傾向がとても強いのは前々から感じてはいましたが、目の絵ばかりが揃った今回の作品には私も少々驚いてしまいました。もちろんルワンダの子ども達も、絵を描くのは大好きです。折り紙を用紙に貼ってやると、余白にいろんな絵を一生懸命書き込んでいます。でも。鉛筆や紙、その他の工作などの材料など、なかなか手に入らないこの国では、小さいころに創造的な活動を経験することが少ないのでしょうか。それでも、時間をたっぷりかけて、共有の色鉛筆を使って絵を描く子ども達は本当に熱心で、色鉛筆一揃いがいかに彼らにとって大切なものであるかと言うことも併せて感じることでした。

■子ども達の学び



子ども達の新しい学校、キガリ・インターナショナル・コミュニティースクール（略称KICS）での一学期が終了しました。空きがないことで心配した共喜の入学も許可され、3人一緒に徒歩20分の学校に元気に通いました。この学校は、生徒数48名、全ての学年が複式で、幼稚園から高校まで、6クラスしかありません。萌と仁は一番上のクラスですが、

仁は、生物・数学は下のクラスに移動します。科目によって、その子のレベルに合わせた柔軟な対応をしてくれるので、勉強にも興味が持てるようになっていると思います。学校では友達関係も充実し、毎週のように、友達の家に泊まりに行ったり、友達が泊まりに来たりしています。テニスと水泳は、学校帰りの子ども達の遊びとなり、そこでまた、ひとしきり友達と遊んでかえってくるという、本当にめいっぱい学校生活を楽しんだ一学期間でした。

3月29日から5月5日まで学校は春休み。春休みの課題は、遅れている国語の勉強を取り戻すこと。毎朝それぞれ一時間半ずつ、国語の教科書、通信教育の教材、漢字に取り組んでいます。ほとんどが英語の生活の中で、国語の必要性を感じていない子供達に国語の指導をするのは一苦勞です。日本にいと、ニュースや宣伝、日常会話で自然に耳に入ってくる言葉でも、家庭内だけの日本語では使わないことが多く、私にとって当たり前前の言い回しが、我が家の子ども達にとっては全く馴染みのない言葉なのです。せめて、国語の教科書をしっかり勉強することで、色々な言葉に触れていけたらと思っています。子ども達が大きくなった今では、本の読み聞かせは全くなくなりましたが、きっと、そういうことを積極的にしていくことも大切なのでしょう。

4月6日記

<佐々木ファミリー祈りのリクエスト>

- ・ 家族の死を悼む人々の心が慰められるように
- ・ 「償いのプロジェクト」が人々の和解のために役立つものになるように
- ・ 「癒しと和解のセミナー」等、REACHの活動の上に神様の導きがあるように
- ・ ピースインターナショナルスクールの子ども達と先生方のために
- ・ 子ども達の学びと生活が充実したものになるように

佐々木さんを支援する会 の皆様へ

佐々木さんへの支援継続のお願い

拝啓

早くも新緑が眩しい季節となって参りましたが、皆様、如何お過ごしでいらっしゃいますか。1994年のルワンダ大虐殺から13年、和解と癒しを掲げる現地NGO“REACH”で働く佐々木和之さんご家族を支えることを目的として立ち上げた「佐々木さんを支援する会」の働きも、早くも3年を経過しようとしています。この間に皆様からのご賛同をいただき、佐々木さんご家族を現地に派遣することが出来ました。そして、佐々木さんもREACHにおける働きを開始し、ご自身の願いであった「償いのプロジェクト」を立ち上げ始められています。

このような展開に対応して、支援する会世話人会ではプロジェクト運営費に関しても、その一部を支援することを決定しました(ウプムエ 6参照)。このように踏み切ることができたのは、皆様からの支援金額が現地で働く佐々木さんの生活費や、日本における「支援する会」活動推進費等の諸経費を超えて寄せられていること、今後もこの働きを継続して支援して下さる方々が多くおられることを見込み、期待したからであります。

佐々木さんは日本バプテスト連盟ミッションボランティアとして派遣され、佐々木さん個人の活動費に関しては日本バプテスト連盟が責任を持つわけですが、現地で立ち上げるプロジェクトの運営に関しては、REACH(のメンバー)が様々な形で募る寄付金で賄っています。

支援する会世話人会では、佐々木さんからの要請を受けて、少しでもこれに応えようということになり、今後も支援継続をして、佐々木さんご家族の生活とともにプロジェクトの運営にも、その一端を担いたいと願っているところです。

このような次第ですので、皆様方には、この趣旨にご賛同いただき、今後とも継続して熱いご支援をいただければ幸いに存じます(世話人会としては、常に3年先を見通しつつご支援して頂けることを願っています)。又、更に皆様の友人・知人へこの働きの輪を広げて頂き、佐々木さんが後顧の憂い無くその働きを進められるよう、ご協力いただければ幸いに存じます。

末筆ながら、これまでの尊いご支援を心から感謝し、皆様のご清祥をお祈りいたします。

ルワンダで働く佐々木さんご一家と、全世界で平和の働きに取り組むすべての人々に神のご加護がありますよう祈りつつ。

敬具

2007年4月 日

佐々木さんを支援する会
世話人代表 金子 敬
世話人会 一同

佐々木さんを支援する会事務局

〒235-0041 横浜市磯子区栗木1-22-3
洋光台キリスト教会内(蛭川明男)
電話 045-774-9861 FAX 045-774-9859
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会/047-341-9459)

郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会
(なお、郵便貯金自動払込手続きも出来ます。事務局にご連絡ください。)

新たに入会くださった方々(12月9日以降)のご芳名は、次号でご紹介させていただきます。ご了承ください。